『海の牙』、「怒りと願い」のあらたな推理小説へ
――初期水上勉論　第四回

田村景子

――要旨

書下ろし長篇推理小説『海の牙』（一九六〇年四月）は、社会的な視野をもつ書下ろし長篇推理小説『霧と影』（一九五九年八月）でデビューしたばかりの「新人」水上勉が、テレビで水俣病の今をめぐるドキュメンタリー番組『奇病のかげに』（同年一一月）を観てすぐ、水俣に赴き二週間ほどの取材ののち一気に書きあげた短篇小説「不知火海沿岸」（同年一二月「別冊文藝春秋」に発表）を、編集者坂本一亀の勧めに応じて発展させた長篇作品である。

『海の牙』には、物語の終盤、「海の牙」の表象が、鮮やかに、そして暗鬱にたちあがる。棄民化され奇病に苦しむ漁民たちの怒りの噴出と、工場による街の繁栄への汚染された暗い海からの怒りの問いかけとして。

本誌連載の初期水上勉論はこれまで、小説「不知火海沿岸」について論じてきた。「不知火海岸」では、棄民化された漁民の怒り、奇病とその原因とみなされる工場への怒りが噴出するものの、「海の牙」という表象はなく、「文明」あるいは「偽文明」への問いかけもあらわれていない。これは小説「不知火海沿岸」からの飛躍を、すなわち『海の牙』の発展的な優位性を示すのか。あるいは、後退を意味するのか。今回は、「不知火海沿岸」の試みをふくむ『海の牙』について、水上勉の発言をまずは「怒りと願い」について、次いで「社会派」と「推理小説」について検討したい。

1　怒りの象徴としての「海の牙」

いったい、「海の牙」とはなにか。

水上勉の初期作品でもっともよく知られた作品のひとつ、長篇『海の牙』には、タイトルでもある「海の牙」が鮮やかに、そして暗鬱にたちあがる二つの場面が出現する。

物語もすでに終わりに近く、漁民が次つぎに奇病に倒れていく水潟市において、外科医で警察嘱託医の木田と、友人で警部補の勢良は、奇病を背景に起きた殺人事件の真相に迫る。が、事件の核心へいたらんとするまさにそのとき、奇病の責任を認めずかたくなに対応を拒みつづける工場への、怒る漁民の大々的な反転をまのあたりにするのだった——。

「船団です！」

山峡の割れ目に見える扇型の海の上を、いま点々と動く蟻のような船。白い船。褐色の船。それらの船団はみな船首に白い旗をなびかせ、暁の海風を切って南へ南へすすんでいた。

「勢良君……」

木田は長い片足を地についてオートバイを支えていた。

「もう、こんなことはやめてもらいたいな。この漁民のことを、誰も親身になって考えてやらないから、こんなことになるのだ」

木田の目頭は充血していた。

割れた山あいの海に、つぎつぎと新しい船が入り、そして消えていく。四人とも、水潟湾に入る漁民の大群を黙って見つめつづけた。（第一二章　湯山温泉）[1]

漁民の暴動におびえる署長によれば、船団はおよそ五〇〇、漁民は四〇〇〇名におよぶ、という。不知火海区漁民の大半が集結したことになる。

一九五九年一一月二日。国会調査団の代議士たちが工場側と会議をかさねている最中、漁民たちは市中をデモ行進した。水潟駅前での総決起大会では、「工場から流れる毒のために魚は死んだ。その魚を喰った漁師たちは気狂いになって死んでいる。なぜ工場が毒水をやめてくれないのか、われわれは工場に問いただしに行こう」という発言に呼応。巨大な波をうち工場に殺到した漁民たちは、三〇〇名の機動隊の制止をふりきり工場になだれこんで施設を破壊した。

「海の牙」はまず、こうした漁民たちの怒りの象徴としてあるだろう。

そして、孤立した漁民たちの怒りの行動は、物語が実際に背景とする不知火海沿岸漁民闘争の歴史的制約を突破していたことも忘れてはならない。

色川大吉が先頃刊行した『不知火海民衆史　上——論説篇』に収められた「不知火海漁民暴動（2）」[2]には次のように記されている。

「当時は、安保闘争の全国的な高揚期であった。社共両党を中心とした安保反対国民共闘会議が数次にわたる統一行動を組んで、数万から十数万の大デモンストレーションをはなばなしくくりかえしていた。また、とくに九州では戦後最大の労働争議といわれる三井三池炭鉱労組の戦いの火ぶたが切られ、炭労も総評も全力をそれに投入していた。そのとき不知火海漁民のたたかいは、それら労働者、市民の運動からも、反安保の統一戦線からも全く除外された陽のさしこまぬ深淵の民として、戦後民衆史の闇の底に位置づけられていたのである」。

この記述は漁民の反乱からほぼ二〇年後のものだが、「この漁民の

ことを、誰も親身になって考えてやらないから、こんなことになるのだ」という木田の思いは、漁民の実際の闘いとほぼ同時だったことに注意したい。不知火海の漁民の切羽詰まったたたかいへのまなざしにおいても、小説『海の牙』は先駆的作品なのである。

不知火海を船首に白い旗をなびかせ走る、怒りの極みに達した漁民たちこそ、孤立無援の闇から出現した無数の「海の牙」にほかならない。

2　「偽文明への告発」としての「海の牙」

しかし、「海の牙」は、それにとどまらなかった。

暴動の際傷ついた漁師と警官を医院で治療したあと、いつものように憤りとともにはてしなく自問自答する木田の内部で、もうひとつの、そしてより巨大な「海の牙」が暗鬱にたちあがるのだ。

物語中にあってとりわけ長く印象的な木田の自問自答を、「第一三章　怒りの街」の結びの部分から、すべて引こう。

> みなが帰ったあとで、はげしい憤りが木田の体をかけめぐっていた。誰がわるいのか。それは、これまで幾度もくりかえしてきた木田の自問自答である。
>
> 〈工場がわるいのか……工場はおそろしい水銀の水を流している、それを認めようとしない。海には浚渫しきれないドベがたまっている。魚は獲ってはいけない。獲った魚を喰えば死の病にとりつかれる。しかし、工場は排水口を閉鎖するわけにゆかない。まだ未解決の問題なんだ。二万五千人の社員、この水潟市の巨大な経済を支えている工場、簡単に閉鎖するわけにはいかない。水銀が原因でないかもしれない。まだ未解決の問題なんだ。二万五千人の社員、この水潟市の巨大な経済を支えている工場、簡単に閉鎖するわけにゆかない。工場がつぶれたら、この市はとたんにうら淋しい漁村に立ちもどるだろう。いや、それよりも、もっとみじめな村になることだろう、死んだ海をかかえた廃村として。工場が煙を吐き、塩化ビニールをつくり、年々生産量を増し、街が栄えること、これが市民五万人のためには望ましいことである。しかし、いま、この市民の繁栄の裏に、八十五人の患者は見捨てられようとしている……漁民はどうなる。不知火海岸の魚は売れなくなった。葦北、天草の漁民が怒るのもそのためだ。水潟湾漁民だけは工場から三百万の金をもらった。しかし、同じ天草、葦北漁民には何らの補償があたえられていない。一億円の補償が出たとしても、それが今や何になるだろう。漁民三千戸に、一戸あて三万円しかならぬではないか。その金で、先祖伝来の漁業をすて、何をして喰えというのか……政治が手落ちなんだ。工場と漁民を結ぶ架け橋になる人間がいないからだ。しかし、誰もがこの問題をすててはいない。代議士たちがやってきた。彼らはこの不幸を一日も早くなくしたい情熱をいだいて帰るだろう。そして、国民に訴えてくれるだろう。それを信じたい。そうすれば、県漁連も、市会も、県会も、さらに努力をつづけてくれるだろう……しかし、この流された血は何だ。耳を取られ、頭を割られ、腕を折った。

生命を守るためにか……工場を守るためにか……海が悪いのか、あの死んだ海が……〉

目を閉じた木田の頭に、深い紫紺色の海底に淀んでいるドベの堆積がうかんだ。死んだ貝、餌蟲、ボラ、チヌ――それらがドベに腹をつけ、よたよたと苦しみもがいている有様を思いえがいた。

〈そうだ、この海……この暗い海の底から、目に見えない何ものかが牙をむいて迫っている〉（第十三章　怒りの街）

東洋化成工業の水潟工場で繁栄するとともに、工場の海への廃棄物に由来するらしい「奇病」で苦しむ水潟市。繁栄を否応なく享受する水潟市民で、外科医として奇病の漁民たちに親身に接するとともに、警察嘱託医として警察の捜査に協力する木田の微妙な位置からの、不安、疑問、困惑が、反復される「しかし」でどこまでも連なる。

奇病に直面する漁民たちへの思いはつよいものの、工場による水潟市の繁栄を享受して暮らすことも否定しがたい。今までなにもしてこなかったと非難する政治への唐突な信頼（願望）。が、それもたちまち「しかし」で否定され、さらなる不安、疑問、困惑へと木田は入り込まないわけにはいかないのである。

木田の思いは、ここで個を超え、水潟を超え、こうした繁栄と惨禍とを同時にもたらす「近代文明」へととどいている。

このとき暗い海の底から出現する「牙」とは、猛烈な勢いで進行する文明への自然からの復讐のあらわれ、「怒り」の表象と考えられよう。

作者水上勉は、ほぼ一〇年の後の一九七一年九月に、長篇『海の牙』の意義について、「偽文明への告発」[3]というタイトルの講演と対談を行っている。公開自主講座「公害原論」第2学期4『公害　被害者の論理』におさめられた講演および講座主宰者宇井純[4]との対談である。そこで水上勉は「公害」について、「私たちが全部加害者になっていやしないか」と問いかけている。全員加害者となる文明は、偽の文明ではないか、と。

「偽文明」という言葉でいうなら、木田が暗い海の底に思いえがく「海の牙」とは、木田の内部からたちあがり、木田自身をも含む「偽文明への告発」といってよい。

初期水上勉論[5]はこれまで、小説『海の牙』の第一稿ともいうべき小説「不知火海沿岸」について論じてきた。結論からいうなら、「不知火海岸」では、棄民化された漁民の怒り、奇病とその原因とみなされる工場への怒りが噴出するものの、「海の牙」という表象はなく、「文明」あるいは「偽文明」への問いかけもあらわれない。

これは小説「不知火海沿岸」からの飛躍を、すなわち『海の牙』の発展的な優位性を示すのか。あるいは、後退を意味するのか。

今回は、「不知火海沿岸」のたくらみをふくむ『海の牙』について、水上勉の発言を検討する。

3　実際の出来事への作者の「怒りと願い」

『海の牙』は一九六〇年四月に刊行された。作者水上勉がこの作品へこめた思いをもっともはやく語ったものに、一九六〇年五月にカッパノベルズから刊行された長篇『耳』の「あとがき」（一九六〇年五月八日の日付有）がある。『耳』は、一九六〇年上半期を対象として同年七月に決まった第四三回直木賞に、長篇『海の牙』とセットで候補作となり落選している。なお、この回の受賞作は池波正太郎の時代小説、短篇「錯乱」であった。

『耳』は、ある争議事件をモデルにして、推理小説に組みたてたものだ。これは、わたしの三番目の書き下ろし長篇小説といえる。かつて私は、『霧と影』という小説で、経済界に起きたトラック部隊事件を、『海の牙』という小説で、九州の水俣市に起きた奇病問題を――といったぐあいに、事実起きた事件について、作者が持たねばならなかった怒りや願いを、推理小説のかたちのなかにとかしこむ努力をしてきた。

推理小説は、どうせエンターテーンメントだから、といった考え方で、トリックや、興味のもり方に力をそそいでおられる作家の立場も理解できるが、私は、どちらかというと、エンターテーンメントのなかに、現実への怒りや願いをこめようと努力してみる立場にあるだろう。とくに、推理小説のもつ恐怖感というものを、私は現実性のあるものにしか感じられないのである。ハリコの虎や、人形の死がこわくないのはわかりきった話である。世の中には、恐怖にみちた事件がつぎつぎと起っている。

現代社会で実際に起きている、人を危機や死へとおいやる「恐怖にみちた事件」への、作者じしんの「怒りや願い」を、一連の長篇作品にこめたと水上勉はいう。

ここであげられた第一作目の『霧と影』における作者の「怒り」については、後に、「『霧と影』『巣の絵』について」[6]で具体的に書いている。「先ず、身辺を見廻して、既成服行商時代に見聞したトラック部隊事件を思いだし、それを材料として、殺人をからませてみようと構想した。トラック部隊事件とは、当時の左翼政党の一部の指導者が、製品のストックで喘いでいる鉄、繊維などの中小企業問屋や工場から、販路を手助けしてやるといって、製品をだまし取り、これを二足三文の値でたたき売って現金化し、問屋には納付せず、政党資金にしたというあくどい詐欺事件である。私は被害をうけた問屋も知っていたし、また、小さいながら、似たような商売を省みて、慄然ともし、『革命』や『思想』をふりかざしている人びとが、大企業ならまだしも、零細な小企業を倒産させて、昂然としている態度に憤りを感じて、その思いをぶっつけてみようとたくらんだのである」。

トラック部隊事件、水俣奇病問題、出版社「主婦と生活社」の長期にわたる争議事件と、水上勉が直面する現代社会において実際に起きた出来事、事件へのこうした作者の「怒り」「憤り」に発した当

時の作品制作の姿勢をおもうとき、『海の牙』にくりかえしあらわれる怒りと憤りの表象としての「海の牙」は、それらの「怒り」「憤り」のもっとも如実かつつよい顕れといえよう。『霧と影』、『海の牙』、『耳』、さらに『巣の絵』、『火の笛』、『爪』と当時の書き下ろし作品をならべてみても「海の牙」というタイトルは強烈である。

と同時に、『海の牙』は、水上勉にとって出来事にたいする「願い」のもっともつよく託された作品でもあった。

『海の牙』は一九六一年二月に、第一四回探偵作家クラブ賞を受賞する。「探偵作家クラブ賞を受賞して」を副題にもつ「『邪道』のなかの感想」は、同年三月三日の東京新聞夕刊の文化欄に掲載された。「推理小説を単なる娯楽作品以上のものにしたいという考えからではなく、作者が今日当面している人生上の問題とか、社会問題とかについての考えを、推理小説の中に色濃くとかし込んでみようという作業は、同じ犯罪小説を書くにしても、書きがいのあることにちがいないと考えて、いくつか試作を試みている」と書きだされた文章で水上勉は、「こんど私は『海の牙』という小説で探偵作家クラブ賞をいただいたが、『ああ、やっぱり私の考えていることが、いくらか認められてきたらしいな』という考えを正直もった」とひそかな喜びを記す。

あれは九州で、未だに原因がわからずに、バタバタ死んでゆかねばならない奇病を背負って、しかも生きてゆかねばならない人々のかなしみを、推理小説のかたちを通じて訴えたかったのである。批評家はやはり、先にいったように、推理小説としてなっていない、といった。本もあまり売れなかった。

私は、今日「海の牙」が賞をもらって、何よりうれしいのは、もう一度、あの九州の悲しい大量殺人事件「水俣病」のことを世の中の人が一人でも多く考えてくれるであろうことへの喜びだ。

病原がわからないので、工場排水の影響ではないという主張と、いや、工場排水が原因だという主張が二つあって、その結論が出ないために、政府が、海を取られて食うに困っている漁民を見捨てている話である。（中略）

賞をいただいて、今日、私ははるか九州の南の涯のあの灰色の海と貧しい病人と村々を思いだして涙ぐむばかりである。水俣の漁民の皆さん、どうか元気でガン張って下さい。

「海の牙」で探偵作家クラブ賞をいただいた感想はこれしかない。

実際の出来事、事件にたいする激しい「怒りと憤り」の作家水上勉が、同時に、実際の出来事、事件がこれ以上悪しき方向に向かわず、良き方向へと向かうのを祈念する「願い」の作家であることをよくあらわしていよう。この後も、『海の牙』について語ったり書いたりするたびに水上勉は、作品にこめた「怒りと願い」にふれることになる。

4　「不安」と「空虚感」をもたらす推理小説

ところが、この『海の牙』は、水上勉にとって「怒りと願い」を実現した作品であるとともに、不安と空虚感をもたらす作品でもあった。なぜか。

たとえば、みずから「私の文学的自叙伝」とよぶ『冬日の日』[7]で、『海の牙』をめぐって次のようなきわめて否定的な感想を記している。

> 約四ヵ月かかって、「海の牙」を完成している。これは、翌年四月に刊行されて、昭和三十五年の探偵作家クラブ賞を授与されたが、世評をあびたにもかかわらず、作者としては、大きな不安が生じた。いや、不安というより、空虚感であった。というのは、せっかくの材料を、推理小説仕立てにしたために、追跡が、いくらか横へそれたことである。かりに、横へそれなくて、ある程度、奇病の実態を訴え得た満足感はあったとしても、推理小説では話にならなかった。それは絵空事の弱さだった。奇病に苦しむ患者の、一滴の涙にも価しなかった。私はこの二冊目の著書でにわかに社会派の名を冠せられたことの恥ずかしさにうろたえ、世評が高まれば高まるほどに、冷たく背なかを吹く風を感じたのである。

この感想から七年後、『海の牙』と『火の笛』を収めた『水上勉全集　第二十三巻』の「あとがき」[8]で水上勉は、当時の追いつめられた状況について、さらにふみこんで語っている。

> 「……『海の牙』は直木賞候補作品となった。一年前の『霧と影』も候補になって落選していたので、受賞するとも思わなかったが、時評家も、勇気ある作品として評価してくれていたので、直木賞候補になっただけでも、水俣病が世間に知ってもらえる喜びはあった。やはり、結果は落選だった。選考委員のことばも舌足らずで、私には不満だった。小説としての出来も、やはり、社会劇と人間劇のはざまで不発になっているところが私にもわかっていたから、もっとおもしろい小説に評がいっても自然だった。しかし、私は、この小説を書いたことで、社会派作家を捨てる心を決めていた。そういう意味で、なつかしいのだった」。『海と牙』を書いて「社会派作家を捨てる心を決めていた」とは、なんとも強烈な表現ではないか。

ここに引用した二つの文章はほぼ同じことを述べていようが、後者には前者にあった「推理小説」への疑いが、言葉もろともに消えてしまっているのも興味深い。一九七〇年には否定的ではあるにせよ『海の牙』を「推理小説」との関係でとらえていた水上勉は、一九七七年には変わって「社会派」との関係でのみとらえている。後者の時点で、水上勉はみずからの戦後の再出発が「社会派」ではあったとしても、「探偵小説」「推理小説」であったとは思っていなかった、少なくとも今の自分をすでに推理作家と任じていなかったのだろう。

『霧と影』や『海の牙』等で一躍注目された当時、『点と線』などで先行する松本清張とともに、社会的探偵小説、社会派推理小説の

旗手とみなされた水上勉は、『海の牙』の試みからまず「推理小説」を消し、ついで「社会派」も消し去ろうとしたことになる。

とはいえ、こうした執拗な消去は逆に、再出発当時の「社会派」および「推理小説」へのつよい関心とこだわりとをうかびあがらせずにはおかない。

5　推理小説になっていない推理小説の実現へ

第四三回直木賞で落選した『海の牙』（および『耳』）は、翌一九六一年二月に第一四回探偵作家クラブ賞を与えられた。その際に書かれた「『邪道』のなかの感想」から、「作者が今日当面している人生上の問題とか、社会問題とかについての考えを、推理小説の中に色濃くとかし込んでみようという作業は、同じ犯罪小説を書くにしても、書きがいのあることにちがいない」を先に引用したが、直後に「受賞の言葉」として書かれた「あだ花の記」[9]でも、推理小説との関係で自らの試みをとらえている。

> 私は、推理小説といえるかどうかわからないもの（自分でもそのように考えている）をこれまで試作してきたが、今後も当分、そういう作業をつづけてゆくつもりである。
>
> 私がなぜそういうことにこだわるかというと、こんどの賞をいただいた夜の各氏の批評にもあったように、推理小説になっていない点がわたしには書き甲斐のあるところであるからだ。
>
> 小説は人間を書かねばならない。したがって、人間のかもし出す事件も、人間の生きる環境や、背後の社会組織などの成立ちを追究しないと書きつくせない。いつもこのようなことを考えているので、書く小説が、ちゃんと纏まってくれない。といって、こっちに透徹した社会眼や人間への見識があるわけでもないのだが……。勝手に人間がひとり歩きしてしまうこともあるし、その人間の人となりに現実性をつけるため、ごてごてと書き込んでいくうちに、スマートな殺人事件からハミ出てしまう仕儀となる。
>
> これは困ったことである。私にはどの小説の中にも一人づつ私の分身がいて、その分身を殺したり、その分身がもつ世の中への怒りやらを出してみたりする楽しみはまた格別なのである。（中略）
>
> 「海の牙」もまた然りである。推理小説の骨法をつかって、社会的な恨みや、人間的な感情を表に出して果たしてみる作家も一人ぐらいはいていゝのだろう、と漫然と自分のことをそのように考えている。いや、試作でなくて、そのようなものを完成してみたいと考えている。（傍点引用者）

「推理小説になっていない点がわたしには書き甲斐のあるところ」とは、推理小説としての弱さを指摘する批評にたいする開き直りにも思えるものの、むしろそういう批評を逆手にとり、推理小説の骨法を使っての今までにない、「社会的な恨みや、人間的な感情」を表出するあらたな推理小説の完成へのつよい願いが語られている。ほぼ同じ時期に書かれたであろう「私の立場」[10]でも、目ざすべきあら

たな推理小説について、より詳細に示されている。

どのジャンルにおいても突出する新人は、既成のジャンルの否定、あるいは乗り越えからはじまるとすれば、水上勉もまたこのとき、そうしたスタートラインをはっきり意識していたといえようか。

では、こうしたあらたな推理小説をめざす水上勉を勇気づけも失望させもした『海の牙』とは、いかなる試みであったか。

この試みにふみこもうとすれば、『海と牙』の成立事情につきあたる。

「海の牙」はその年の十一月に、わたしが九州の熊本まで出かけて、この眼で見た水俣病事件を素材にしたものであった。「不知火海沿岸」という百二十枚の短篇で、別冊文芸春秋に発表したものだ。これを発表したことで、私は池島信平氏の支持を得た。私が一流雑誌に小説を発表した最初のことであった。この作品をよんだ坂本一亀氏はまた、私に、四百枚の加筆を申込んできた。すなわち、「不知火海沿岸」では、尻きれとんぼで何らの解決がついていないから、完結させろというのであった。なるほど、「不知火海沿岸」には殺人はあった。しかし、なぜ殺されたのか。何故そんな死に方をしたのか。すべてを謎にして、作者は読者と共に、犯人のことや、かなしい水俣病のことを考えようではないか、とつき放したところに意味があると信じていた。ところが、坂本氏の熱意ある再度のすすめで、私はこの殺人事件に犯人を出し、水俣病犯人を出す決心をした。「海の牙」は翌年三月に脱稿された。約半年かかったわけである。(11)

解決をめぐる推理小説のありかたについて、水上勉は小説「不知火海沿岸」において、編集者坂本一亀の推理小説観と別の、まさしく事件が解決で締めくくられる従来の推理小説とは別のありかたを提出していたことになる。

初期水上勉論では、これまで三回にわたり「すべてを謎にして」つきはなすという試みとして、小説「不知火海沿岸」を論じてきた。型破りの推理小説、推理小説にはなっていない推理小説といえば、「不知火海沿岸」こそふさわしいか。とはいえ、熱心な編集者の要求に従い、「殺人事件に犯人を出し、水俣病犯人を出す決心をした」のも、事実なのである。

ならば、「海の牙」なる「怒りと願い」を突出させた小説『海の牙』がはたして従来型推理小説の枠をどう打破し、どう打破できなかったのか。次なる論考では、作者水上勉の推理小説的達成と文学的転身を扱いたい。

――注

(1) テキストは『海の牙』(一九六〇年四月　河出書房新社刊)を使用する。

(2)「不知火海漁民暴動(2)」、色川大吉『不知火海民衆史　上――論説篇』(二〇二〇年一〇月　揺籃社刊)所収。引用は八二ページより。

(3)「偽文明への告発」(一九七一年九月)、公開自主講座「公害原論」第2学期4『公害　被害者の論理』(一九七一年七月)も収められている。

(4) 宇井純は、公害をめぐる画期的な著作『公害の政治学――水俣病を追って――』(一九六八年七月　三省堂新書)の「4　不知火海漁民騒動」で、水上勉の『海の牙』についてふれ次のように書いている。一一月二日の「こ

の乱入が計画的なものだったかどうかは後々まで議論のまとになった。しかし漁民の押さえ切れぬうっぷんが指導者の統制を乗り越えて騒ぎを大きく広げてしまったことは確かである。もし組織的に乱入する計画が前から立てられていたならば、もうすこし効果的な打撃を工場に与えて、当分の間、操業停止に追い込んでいただろう。後に水上勉氏はこの事件を題材にした長篇推理小説『海の牙』で陰謀物語をからませたが、これはもちろんフィクションで、実際には事件はもっと泥くさいものだった」。引用は一〇四ページより。

(5) 田村景子「『不知火海沿岸』と水俣「奇病」――初期水上勉論　第一回」(「和光大学表現学部紀要」二〇一八年三月、一七三～一八四ページ)、同「『不知火海沿岸』における棄民と奇病の社会的地理――初期水上勉論　第二回」(「和光大学表現学部紀要」二〇一九年三月、一三〇～一四二ページ)、同『不知火海沿岸』、血を噴きあげる怒りの街へ――初期水上勉論　第三回」(「和光大学表現学部紀要」二〇二〇年三月、一一三～一三〇ページ)。

(6) 「『霧と影』『巣の絵』について」、『水上勉社会派傑作選1　霧と影・巣の絵』(一九七三年一月　朝日新聞社刊)所収。以下の引用は三七三ページより。

(7) 『冬日の道』(一九七〇年三月　中央公論社刊)。引用は、九四～九五ページより。

(8) 「あとがき」、『水上勉全集　第二十三巻』(一九七七年一一月　中央公論社刊)所収。引用は六四一～六四二ページより。

(9) 「あだ花の記」(一九六一年四月)、雑誌「面白半分」三月臨時増刊号『かくて、水上勉』(一九八〇年三月)所収。引用は、二四四ページより。

(10) 「私の立場」、雑誌「文学」(一九六一年四月　岩波書店)の「特集　日本の推理小説・探偵小説」に、松本清張「推理小説独言」、村松剛「松本清張と探偵小説」、佐野洋「探偵小説の評価基準」、高木彬光「推理小説の構成」などとともに掲載された。『霧と影』『海の牙』の新人水上勉は、すでに松本清張につぐ、というより並びたつ重要作家の扱いになっている。

(11) 「『霧と影』『海の牙』を書いた頃」、『カワデ・ペーパーバックス6　霧と影　海の牙』(一九六二年八月　河出書房新社)所収。引用は三三七～三三八ページより。